

## 類推と誤用

**身** 長120cmになった6歳の娘が、身長100cmの息子(=娘にとっては、弟)を相手によく言うことばが気になっている。

「ここまで、届ける? 届けない?」

背が高い娘のほうが、より高い所に手が届くのはあたりまえなのだが、小さな弟を相手にそれを試しては楽しんでいる。その行為そのものはいいのだが、問題は「届ける」「届けない」という言い方だ。

日本語には「可能動詞」と呼ばれる動詞がある。「歩く(aruk-u)」に対する「歩ける(aruk-eru)」、「読む(yom-u)」に対する「読める(yom-eru)」などだ。五段活用の動詞を下一段活用に転換させる(「-u」を「-eru」に変える)と、「～できる」という意味を表す可能動詞になる。もちろん、6歳の娘にこんな文法的な知識があるはずはない。単にこれまでの言語生活の中で「話す」→「話せる」、「書く」→「書ける」などを使ってきたことから類推し、「届く(todok-u)」も「届ける(todok-eru)」に変えれば「～できる」という意味になると考えたのだろう。しかし、「届ける」は可能動詞ではない。五段活用の動詞の中には、「苦しむ」→「苦しめる」、「育つ」→「育てる」など、同じように転換させても可能動詞にならないものがある。「届く」も同様で、娘の例でいえば「届く? 届かない?」と言うのが正しい。

幼い子どもの例ではあるが、この類推による誤用は2つの意味で興味深いことを提示してくれている。ひとつは、ようやくひらがなの五十音図を書けるようになったばかりの子どもにも、こんな類推ができるのだという人間の言語発達能力に対する驚き。もうひとつは、類推による誤用の広がり想像できる実例である点だ。しばしば指摘される「ら抜きことば」は、同じ類推が働いているとも考えられる。「見る(mir-u)」→「見れる(mir-eru)」、「食べる(taber-u)」→「食べれる(taber-eru)」など五段活用以外の動詞を同じように転換させると、可能の意味をもつ「ら抜きことば」ができあがるのだ。旺文社が小学生～高校生を対象に行ったアンケートでは、「食べれない」という言い方について、6割近くが「日本語として正しい」と答えたという。「ら抜きことば」が“正しい”と認められるようになるのも時間の問題か。

それでも、「届ける」が「届くことができる」という意味の可能動詞になることは決してないだろうと思う私は、娘に『届ける』って言わないんだよ。『届く』でいいんだよ。」と何度も指摘しているのだが、一向に直らない。類推能力はあっても、修正能力はもち合わせていないようだ。

太田真希恵(おた まきえ)